



Title	言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス
Author(s)	山泉, 実
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 44-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス*

山泉 実

1 はじめに

2019 年 8 月、日本認知言語学会と国際認知言語学会 (International Cognitive Linguistics Conference。以下、両者をまとめて認知言語学会と呼ぶ) に続けて参加した。どちらの学会でも、認知言語学の何らかの枠組みを使って具体的な現象を分析し、上手く分析できたという結果を報告するだけの発表 (以下、分析成功報告と呼ぶ) が多かったという印象を受けた。筆者にとって分析成功報告はあまり興味がそそられるものではなかった。なぜなのかを考えたところ、単なる筆者の嗜好にとどまらず、言語研究にまつわるいくつかの問題と関連していることがわかってきた。以下では、それらを言語の理論的研究を阻害するバイアスという観点から概観していく。¹

勿論筆者は全ての発表を見たわけではない。そこで、本稿執筆にあたって参加した大会の予稿集 (conference handbook) を調査し、認知言語学の枠組み自体に対して問題点を指摘し改良を提案しているものがあつたのかを調査してみた。まず、予稿集のページ制限が 1 ページしかない発表は調査が難しいため除外した。これには国際認知言語学会のポスター発表と口頭発表、日本認知言語学会のポスター発表が含まれる。そして基調講演も除くと、51 の発表 (日本認知言語学会のワークショップ発表 17、シンポジウム 4、口頭発表 30) が残った。従って、このちょっとした調査は日本認知言語学会の第 20 回大会を対象としたものとなる。本稿以下の議論も、筆者は海外の事情をほとんど知らないため、基本的には日本国内についてのものである。さて、予稿集を通して見たところ、やはり分析成功報告や、調査結果が従来言われていた傾向に従っていることを報告したものが圧倒的に多く、分析に使った枠組み自体の問題を指摘したものは 1 つも見つからなかった。記述レベルにおいて従来言われていた一般化に反することを、その当否はともかく理論の改訂の提案無しに指摘したものさえ、Mita (2019)、秋田 (2019)、平岩 (2019) 程度であつた (勿論、このカテゴリーに含めるかどうかの判断から主観を完全に排することは不可能である)。唯一、Polo-Sherk (2019) だけが、分析のための概念を新たなものとして提案していた。認知言語学は理論言語学の一学派と考えられているものの、この度の日本認知言語学会では理論的進歩はその試みさえほぼ無かつたということになる。後述の通り、他の学派でも大差はないようだ。なぜこのような状況になっているのだろうか。

2 確証バイアス

人間の認知について確証バイアスというものがあることが広く知られている。² ごく大雑把に言うと、人間は自分が信じていることに合致すること、つまり自分の信念を確証す

ることが目についたり思いついたりしやすく、しかもそれを重視しやすい。逆に、自分が信じていることに反することは目についたり思いついたりしにくく、気付いても軽視する傾向があるということである。それを示した有名な実験（Wason 1960）を紹介する。この研究では、被験者は{2, 4, 6}のような3つの数から成る数列を提示され、その数列を生成した規則を当てさせられる。その際に、被験者は自分で作った数列の例を提示して、実験者にそれが突き止めるべき規則に従っているか否かを聞くことができる。³ 読者が被験者なら、{2, 4, 6}と提示されたときに、どのような規則を予測し、どのような数列を実験者に提示するだろうか。

被験者への指示には、規則に従った数列を提示することが目標ではなく、規則を発見することが目標であるとあった。それにも関わらず、被験者が{2, 4, 6}からたとえば「増加していく連続する偶数」という規則を予想した場合、{8, 10, 12}のような規則に従っている例を実験者に提示して問うことが多かった。実はこれは賢い方法ではない。自分が信じる規則に合致するものについて「規則に従っている」という答えが実験者から期待通り返ってきて、その仮説の確からしさは気持ちの上でしか高まっていないからである。たとえば実際の規則は「増加していく整数」のようなもっと緩いものかもしれない、{2, 4, 6}や{8, 10, 12}だけでなく、{1, 4, 9}でもよいかもしれない。

規則を当てるためには、{1, 4, 9}や{3, 5, 7}のような予想した規則に従っていない例をあえて作って、それが規則に当てはまっているかどうかを聞いてみるべきである。「規則に従っていない」という答えが返ってくれば「増加していく連続する偶数」と競合する仮説である「増加していく整数」のような仮説を排除することができる。逆に「規則に従っている」という答えが返ってきた場合には、自分の仮説は反証され、新たな仮説を立てる必要が出てくる。いずれにせよ正解に近づくことになるのである。しかし、人間は確証バイアスのために自分の仮説に反するようなことは思いつきにくく、そのようなものを実験者に尋ねた被験者は多くはなかった。⁴ そして、一度も間違えずに答えを当てられた者は、そうでない者に比べて、仮説を反証するための例を尋ねる割合が有意に高かった（p. 133）。なお、確証バイアスは、単なる人間の認知の設計ミスではなく、適応的意義があるとされている（Mercier and Sperber 2017: 11 章）。

言語研究における確証バイアス

確証バイアスが言語研究にとって問題となり得る一つの局面は、例文の容認性を論文の筆者自身が判断する場合である。人の行動の研究においては、研究者の期待が実験結果にバイアスをかけるリスクが大きい。被験者が無意識に研究者の期待を意識してそれに従うよう行動する可能性があるためである（Fanelli 2010: 7。Latour 2000: 116 も参照）。容認性判断という理論言語学の実験を論文の筆者自身が行う場合、研究者でもある被験者は自分の期待を明確に知っているため、バイアスのリスクは更に大きいだろう（Sholtz et al. 2015:

3.1)。このリスクが顕在化しても論文が世に出るまで露見しない最も危険なケースは、論文を審査する者に対象言語の話者がいない場合、典型的には日本語母語話者が外国の大学院で日本語に関する学位論文を書き、審査委員に日本語母語話者がいない場合である。容認性判断が分かれる場合にどうやってその研究を先に進めるべきかは難しい。異なる判断を下す者は説明対象たる言語知識が異なるということになりかねないからである。とはいえ、対象言語の現代語の標準的バリエティを研究している体裁を取りながらも母語話者の多くとかけ離れている判断をしている場合には、批判を免れないだろう。筆者は、日本語母語話者が外国の大学院で日本語について書いた博士論文にある、理論的に重要な帰結をもたらすが疑わしい容認性判断に対して、日本語母語話者約 50 名へのアンケートによって反論を試みたことがある (Yamaizumi 2018: 4.3)。以上の問題は、後述の心理学における仮説の事前登録制度が始まるきっかけとなった再現可能性危機 (池田・平石 2016a) が言語学においても起こり得るということを示している。実際、生成文法について「データの文法性 (容認性) 判断があまりにも微妙になり、不信感が生じた」(p. 79) と三宅 (2017) は述べていて、このことは、記述的現代日本語文法研究と生成文法が 1970 年代までは良い影響を与え合っていたのに、その後疎遠になって現在は「完全に別居状態」といっても過言ではない状態となった理由の 1 つとして挙げられている。⁵ 再現可能性危機に対する対策として取られている仮説の事前登録や results-blind/free review といった制度 (後述) は理論言語学には馴染みにくいものの、追試 (replication) にあたる例文の容認性判断の再調査は理論言語学でも可能であり、場合によっては意義のあることだと筆者は考える。

話を Wason (1960) の実験に戻そう。この実験は、科学の問題解決をシミュレートしたものであった (p. 139)。数列の例を生成することが実験に相当し、それが求める規則に従っているかどうかの情報は実験結果に相当する。言語研究者の多くもこの実験の被験者と同じような活動をしている。つまり、観察される言語データから背後にある規則 (多くは母語話者の言語知識) を探っている。その際に、ある言語表現が容認可能 (≡規則に従っている) か不可能 (≡規則に従っていない) かが大きな手がかりとなる。そのため、この実験と成功分析報告の間には、以下のようなアナロジーが成り立つだろう。

自分が支持している分析に使った枠組み

≡「増加していく連続する偶数」のような自分の信じる仮説

分析が上手くいきそうな現象 (構文などの分析対象)

≡ {8, 10, 12} のような仮説に従っている例

上手くいったという分析結果

≡例は規則に従っているという実験者からの期待通りの答え

このアナロジーが成り立つのなら、分析成功報告の発表は、自分の支持する枠組みの確か

らしさを気持ちの上でしか高めることがなく、理論的にはなんらの貢献もないということになる（後述するように記述的な貢献はあり、そういった研究が無価値なわけではない）。それにも関わらずこのような発表が大半を占めるのには、筆者の考えるところでは多くの原因がある。上の確証バイアスだけでなく、学術出版に広く見られるパブリケーションバイアス（3節）、言語学界に根強い記述バイアス（4節）、さらに師弟関係バイアス（6節）と筆者が名付けるものも原因として考えられる。以下、これらを順に検討していく。

3 パブリケーションバイアス

認知言語学の枠組みFでまだ分析されていない現象Pを分析して上手くいったという分析成功報告と、Fで同じくまだ分析されていない現象Qを分析して上手くいかなかったという報告が認知言語学の学会に応募されたとしよう（どちらも枠組みを正しく理解・適用しているものとする）。上で述べた通り、前者は報告が正確である限りはその枠組みを進展させる潜在力がない一方で、後者は枠組みを進展させるきっかけになり得る。しかし、この道理はどの学術研究の成果をパブリッシュするべきかを決める方針に反映されていない（Mahoney 1977: 174）。他の条件が同じならば、分析成功報告の方が学会発表として採用される確率が高いということは多くの言語研究者が同意するだろう。仮説に対して肯定的な結果を報告した論文の方が、そうでない報告をした論文よりもパブリッシュされやすいという代表性の偏り（肯定的結果バイアス *positive-outcome bias*）は学術研究において広く見られる。仮説を支持する論文が多いということは、認知言語学に特有の問題ではなく他の分野にも言えるようで、20の分野の仮説検証報告論文2434篇を調査したFanelli（2010）によると、84%が仮説を少なくとも部分的に支持する結果を報告していた（p. 3）。Fanelli（2012）のタイトル“*Negative results are disappearing from most disciplines and countries*”が端的に示しているように、仮説を支持する研究が支配的であることは分野を超えた世界的な傾向であり、しかも同論文によると日本では特にその傾向が強い。

言語の理論的研究を阻害する一因と考えられるこのパブリケーションバイアスは、複合的要因によって引き起こされている。査読者が分析成功報告や仮説に対して肯定的な結果の報告を採択しやすい（Findley et al. 2016）ということだけでなく、研究者自身、分析が上手くいかなかった場合には、データの捏造などに手を染めることは少なくとも、発表を自粛することは多いだろう。Franco et al.（2014）の調査は、社会科学についてのものであるが、得られた結果が当初の仮説に対して否定的だと、研究者は論文を書いて投稿しても受理されないことを予期して、約2/3の場合に論文を書きもしないことを明らかにした。

パブリケーションバイアスの悪影響は広く認識されている（Fanelli 2010, 2012; Franco et al. 2014, Munafò et al. 2017等）。その一つは、パブリッシュされやすい研究が偏っていると、意識的・無意識的な「研究者の疑わしい研究行為」を招くことである。これはひいては、心理学などで見られた信頼性危機につながる（池田・平石 2016a）。また、否定的証拠がパ

ブリッシュされないことで、メタアナリシスが難しくなってしまう(池田・平石 2016b: 17)。メタアナリシスのような正式な調査でなくとも、否定的証拠が観察されたのに公になっていなければ、パブリッシュされた文献の知見は実際よりも強い証拠に支えられているように見えてしまう(Munafò 2017: 3)。言語学においてもパブリケーションバイアスのために理論が実際より完成されたものであるかのように見られているかもしれない。

認知言語学における現状がどれほど深刻かはともかく、学会の支持する枠組みの発展に寄与することが少ない分析成功報告が大半を占めるというこの状況は、健全とは言えない。分析が上手いかなかったというアブストラクトが採用されやすくするため、さらに研究を進める必要がある。それには少なくとも2つの方法が考えられる。

(a) 枠組み F を現象 Q が分析できるように改訂する。

(b) 複数の枠組み F、G による同じ現象 Q の分析を比較し、どちらの枠組みが優れているかを論じる。

どちらも楽な道ではない。まず、アブストラクトの字数も発表時間もかなりタイトになることは間違いない。(b)のやり方をとるなら、実際にやるとしたら自分が支持しない枠組みにも精通しなければならないし、当初自分が支持していた枠組みを支持しないという発表をしたい人は少ないだろう。認知言語学会であれば、認知言語学の複数の枠組みを比較するような発表もあってよさそうだが、そういった発表は今回の調査では見当たらなかった。また、(a)(b)どちらの方法をとるにしても、分析成功報告の研究よりもしなければならないことが多くなることは間違いない。研究のパフォーマンスを人類の知識への貢献ではなく、個人の研究業績の数で測るとしたら、このような研究は分析成功報告よりもコストパフォーマンスが明らかに悪い。以上の事情が、理論の発展に寄与しない分析成功報告の発表が多くなる一因として考えられる。特に認知言語学会のように学会全体で理論的方向性が決まっている場合には、学会が支持する枠組みによる分析成功報告が多くなりがちである。たとえば、同じ現象を認知言語学の枠組みと非認知言語学の枠組みで分析し、後者でだけ上手いといった学会発表は、誰の手によるものであれ認知言語学者が重く受け止めるべきものであるが、そのような発表は認知言語学会でこれまでであったのだろうか。

この状況に対してどのような対策が考えられるだろうか。ラディカルな対策としては、投稿・査読・採用という経路以外によるパブリケーションを増やすことがある。インターネットの普及により、研究成果を公開することは、論文の形であれ録画した口頭発表の形であれ、物理的には制約がなくなった。学会・ジャーナル以外においても単にパブリケーションしっぱなしで終わっているわけではなく、査読以外のピアレビューの制度(プレプリントサーバーにアップロードされた草稿への公開コメントやパブリケーション後のピアレビュー)が存在する(Munafò 2017: 5-6)。穏健な対策としては、発表時間・応募アブストラクトの上限を学会が長くすることや、分析失敗報告を容認、さらには推奨することが挙げられる。たとえば認知言語学会では認知言語学の枠組みで現象を分析したら上手くい

かなかったということを報告するだけの発表を、分析成功報告よりも優先して採択すべきである。もし Wason (1960) の被験者が実験者に尋ねる機会が、学会発表の枠のように限られていたら、{8, 10, 12} のような仮説に従っている例を優先して尋ねるべきではない。それと同じ理由で、分析成功報告は優先して採択すべきものではなからう。

既存の権威ある学会・ジャーナルが採択の方針を明示的に転換することが有効であり、従来の学会・ジャーナルで歓迎される分析成功報告・仮説検証成功論文を除外する学会・ジャーナルを設立しても成功する可能性は低そうだ。Giner-Sorolla (2012: 565) によると、1970 年代にも心理学の再現性危機が起こり、その反省として *Replications in Social Psychology* 誌のような再現実験専門誌ができたものの短命に終わった。現代の否定的結果の専門誌も栄えてはいないようである。*Negative Results* 誌 (<https://www.negative-results.org/>) は、2017 年の論文 1 篇しか確認できなかった。2002 年に始まった *Journal of Negative Results in BioMedicine* 誌 (<https://jnrbm.biomedcentral.com/>) は、2017 年に発行を止めている。*Journal of Negative Results* 誌 (<http://www.jnr-eeb.org/>) は、2004 年から 2013 年までは毎年 1、2 篇の論文を採録して発行されていたものの、その後は、2016 年に 2 篇、2018 年に 1 篇と、勢いが落ちているようである。既存のジャーナルで歓迎されないタイプの論文は、業績として低く、あるいはマイナスに評価される (p. 564) という理由で、これらのジャーナルは栄えることが難しいのだろう。これに関連して、Giner-Sorolla (2012) は、キャリアをめぐる熾烈な争いをしている「学生・研究者が時間と資源の厳しい制約に直面したとき、失敗を葬り去らずに報告しようと労力を費やしたり、自分の仕事を推進しないで誰かの仕事を繰り返そうとするのはバカだけだ」(p. 564、筆者訳) とまで述べている。

以上の問題の根底にあるのは、研究は上手くいけばいくほど、問題が残らずに終わるという幻想ではないだろうか。この幻想は論文が推理小説のように何も謎を残さず終わることを期待させるものの、問題を残さずに終わった研究は寡聞にして知らない。上手くいった研究ほど議論を呼び、新たな問題を惹起するものである。幻想の背後には、科学的な知識は 100% 正しいと決まっているか全く正しくないかのどちらかだという、科学研究者に直接尋ねたら誰も同意しないような素朴な知識の理想化認知モデル (レイコフ 1987/1993) があるように思われる。同様の観点から、Giner-Sorolla (2012)、池田・平石 (2016a) では、心理学研究において結果の一貫性・完璧性 (perfection)、物語性 (narrative facility)、新規性 (novelty) という審美的な基準から研究を評価してしまうことの問題が論じられている Kerr (1998) の “a “good” science script” も同様の趣旨のものである。

言語学研究を論文にまとめる際も、分析が成功している部分が大きく扱われ、反例などの上手くいかなかった部分は、註などにマージナライズされる傾向にある。これも後続の研究の進展という観点からはよいことではない。そういった部分の今後の研究につながるという点での重要性は、上手くいった部分に勝るとも劣らない。このことを考えると、査読のはその研究が明らかにしたことに基づいた加点方式で行うことが望ましく、その研究

が残した謎を減点対象とすることは望ましくない。

他分野におけるパブリケーションバイアス対策は言語学に有効か

心理学では、以上で論じたようなパブリケーションバイアスが広く認識されていて、近年様々な対策が取られている。加藤(2018)は、「実際に否定的結果は明らかに掲載されにくく(e.g., Fanelli, 2010, 2012; Franco et al., 2014)、不採択になりやすい(Turner et al., 2008)⁶」ということを前提として、『パーソナリティ研究』誌の査読者に以下のように指針を示している。「査読者は results-blind review を心がけ、研究結果を読んだ後に査読の方向性を決めてはならない。また、仮説に対して否定的結果であることを理由に、不採択の提案を行ってはならない」(p. 114)。⁷ 海外のジャーナルに続いて同誌も導入した仮説の事前登録制度では、実験の前に仮説と実験方法だけを第三者機関に登録する。こうすることで、*p-hacking* (有意な *p* 値を得るために統計的検定を試行錯誤すること) や、*HARKing* (Hypothesizing After the Results are Known の頭字語、Kerr 1998)⁸ という「疑わしい研究行為 (questionable research practice、加藤 2018)」ができなくなる(山田 2018)。もっとも、*PARKing* (Pre-registering After the Results are Known、Yamada 2018) は依然として可能である(他にも可能な手法は Findley et al. 2016: 14 参照)。

仮説の事前登録につきものの results-blind/free review では、結果がたとえ出ていてもそれを読まない状態のまま査読を行って採否の考慮に入れない。Findley et al. (2016) では、results-blind/free review を行った経験に基づき、比較政治学における一部の研究に対してはそれが有効であることが主張されている。それと同時に質的ケース・スタディ (qualitative case studies)、歴史的比較研究、エスノグラフィー研究、モデルを構築していく探索的研究などについては、事前登録と results-blind/free review の方式は不可能で、実際に応募が無かったとも述べられている (pp. 23–25)。これらのタイプの研究では、最初に研究者が抱いていた漠然としていることもある仮説と事例の詳細との相互作用から理論と議論が形づくられ、理論と証拠の関わり合いを優先するため、結果を切り離して論文を評価することができないという理由からである。

理論言語学研究は、認識論的立場としてはエスノグラフィー研究などの解釈主義的立場 (interpretivism) よりも、results-blind/free review と相性がよい実証主義的立場に近いものが多い。生成文法は明らかにそうであるし、認知言語学の大部分もそうであろう。(ただし、認知言語学は理論言語学およびそれと対置される解釈言語学の二重性を持つとし、後者をリサーチプログラムとして提示し、小規模な試行を提示している大堀 2017 のような例外も存在する)。しかし、理論言語学の研究のほとんどには、仮説の事前登録や results-blind/free review は馴染まなそう。理論言語学の研究が結果を切り離して論文を評価することが難しいのは、一つには理論が未成熟で仮説を探索的に模索する段階にあるためかもしれない。

⁹ 仮説の事前登録は、データから独立の確認型研究 (仮説検証に重要) とデータに依存し

た探索型研究（仮説生成に重要）の区別を明確し（Munafò et al. 2017: 3–4）、実験・調査前から予測されていた分析と、探索的分析結果を峻別することによって、「*p* hacking や HARKing などが入り込む余地を研究に作ってしまうこと」を防ぐ（池田・平石 2016b: 16）のものであって、探索的分析を妨げるものではない。また、容認性判断は実験と言えるものの、研究者自身が判断する場合は例文がある時点で実験は終わってしまっているという点でも理論言語学の論文は仮説の事前登録に馴染まない。仮説の事前登録と *result-blind/free review* は、言語学に直接応用することは難しいものの、理念の部分では参考になる部分があるためここで紹介した。

4 記述研究バイアス

分析成功報告は、既に述べたように理論の進歩に直接貢献するものではない。自分の支持する枠組みで現象を分析したら上手くいったというだけの研究は、その枠組がどんなに専門的であっても理論的研究ではなく、良かれ悪しかれ記述的研究である。ここでの理論的研究と記述的研究の分け方は、一般的ではないかもしれない。たとえば、三宅（2017）における「理論」と「記述」の分け方とは異なるものである。両者の間に壁がある現状を憂いている三宅にとっての「理論」とは、「生成文法や認知言語学等の、特定の「理論」に基づく研究」（p. 74）のことであり、筆者が参加した認知言語学会で発表されたものは全てこの範疇に含まれる。三宅の「記述」とは、「現在、文法分野の共時的な日本語研究（現代語研究）において、研究者数の点で多数と思われる“「記述」を前面に出す研究”」（p. 76、下線は引用者）のことで、以下のような特徴を持つとされる。

①特定の言語理論のモデルを用いない。②日本語教育という実用面への応用を視野に入れている（ていた）。③伝統的な日本語研究（国語学）の影響をほぼ受けていない。

上の①が重要で、「記述」の名のもとに、意識的に理論的なモデルを用いた分析を避ける傾向があると言えます。「記述すること」と「理論的に説明すること」は本来、矛盾するものではないにもかかわらず、この分野における「記述」は、「非理論」のことと言ってもよいような状況にあります。（p. 76、註は省略）

注意すべきは、天野・三宅・大木（2019: 90–91）が鼎談において同意しているように、日本語記述文法研究会編『現代日本語文法』シリーズ（くろしお出版）に代表されるような記述的研究であっても理論を前面に押し出していないだけ（あるいは理論に無自覚なだけ）で、何らかの理論・枠組みに基づいてはいるということである。そもそも全く理論を抜きにして、たとえば名詞・動詞、文、語といったカテゴリー（これらも理論的に問題となり得る）を用いずに言語を記述することはできない。なお、言語の記述に価値が無いわけではないことは言うまでもなく、理論的研究は適切な記述的一般化の上に初めて成り立つ。

ただ、筆者は、後述の田窪(1998)同様、記述的一般化で終わっている研究論文は、記述が良質でも高くは評価し難いという立場である。

4.1 文法研究諸派における記述派と理論構築派の割合

三宅によると、上に引用した通り、現代日本語文法研究においては、“非理論”の「記述」的研究を行っている者が多数派であり、認知言語学や生成文法の理論に基づく研究を行っている者は少数派である。ここで筆者が強調したいことは、三宅が「理論」に分類する認知言語学研究者の中でも、1節で見たように大多数は理論を使った記述的研究を行っているということである。そのような特定の理論を自覚しつつ、それに基づく記述的研究を理論基盤記述研究ということにしよう。それに対して、理論自体を新たに構築したり既にある理論を改良したりすることを目指す研究は理論構築研究ということにする。言うまでもなく、新たな理論と言っても既存の理論の影響が全くないわけではないため、構築と改良は既存の理論との距離による連続体を成す。同様に、理論基盤記述派と理論構築派という“理論”言語学研究者の分類は、厳密に二値的なものではなく、どちらに重点があるかによる分類である。1人の研究者においても、研究によって理論基盤記述と理論構築の割合は変わってくるだろう。しかし、2019年の認知言語学会では、理論基盤記述がほぼ100%の研究が多くを占めていた。そのため、認知言語学の研究者の理論基盤記述派と理論構築派を1人の中での割合によって集計できたとしたら、半々位の者が最も多いベルカーブ状の分布になっているのではなく、理論構築側が尻尾になったロングテール状の分布をしているのではないかと考える。理論構築研究を行っている者はかなり少ないということである。

4.1.1 国語学

他の少数派、つまり「記述」を前面に出さないとされる学派はどうかというと、国語学も認知言語学と似たような状況にあるようだ。三宅は、「伝統的な日本語研究(国語学)の強い影響下にあるものは、「記述」を前面に出す研究とは見なされない」(p. 78)と述べ、両者を明確に区別した上で、両者が互いを次のように見ていると記述している。「伝統的な日本語研究の影響下にある現代語の文法研究は、「記述」派の研究者の目には思弁的に過ぎる(実証性に欠ける)と映った」(p. 77)。「伝統的な日本語研究(国語学)の継承の下に文法研究を行う研究者からは逆に、「記述」を全面に出す研究は本質的な「説明」をしようとしていないというような、厳しい批判を受けています。」(pp. 77-78) これを読む限りでは、本質的な説明を提供しようとしている国語学的文法研究は理論志向が強いようにも見える。しかし、国語学内部の人と言ってもおそらく差し支えない金水(1997)によると「『国語学者』のうちの文法の専門家の多くは、理論的にはほぼ大文法家の学説を墨守しながら、その枠内で古典資料の記述的研究に没頭している。後述するように大文法家の学説を批判的に継承し、発展に努めている研究者もいるのだが、彼らは少数派に属すると言ってよい」(p.122)

とのことであった。国語学の別の専門家によると、現在でもこの状況は変わらない。金水の言を借りると次のように言える認知言語学の状況と大差ないようである。“「認知言語学」の専門家の多くは、理論的にはほぼラネカー、レイコフ、ゴールドバーグ、テイラー等の大家の学説を墨守しながら、その枠内でコーパスなどの現代語資料の記述的研究に没頭している。”

国語学者と言えは古くは四大文法家、現代では川端善明や尾上圭介など、説明・理論志向の強い研究者ばかりが筆者には思い浮かぶけれども、大きな理論的貢献をした研究者は他分野でもよく知られる可能性が高いが、そのような研究者はどの分野でも例外的な極少数で、他の研究者は大多数が理論的貢献のない記述的研究をしているということなのだろう。認知言語学研究者も他分野で知られているのは、上記のように大きな理論的貢献をした者だけであろうし、生成文法もチョムスキー、ジャッケンドフなど理論家ばかりが他分野では知られている。さらに、現代日本語の「記述」的研究についても、他分野でも知られる寺村秀夫、南不二男、仁田義雄などは、理論を前面に押し出しているかはともかく、それなりに独自に理論を構築したと言えよう。

4.1.2 生成文法

最も理論志向が強いと思われる生成文法についてはどうだろうか。生成文法業界に全く詳しくない筆者は、公刊された情報も見つけられなかったけれども、理論構築派の生成文法研究者から、匿名を条件に日本における事情を詳しく聞くことができた。事柄の性質上、情報提供者の憶測・偏見を交えた私見であることは言うまでもないが、生成文法においても理論基盤記述派が大多数とのことである。この点に関して、星浩司氏の所見も（自戒の意味も込めてとのことだが）同様であった。

生成文法業界には興味深い歴史的事情がある。チョムスキー一人が中心となって理論の進展を牽引してきた主流派（チョムスキー派）生成文法は、1990年代にGB理論（統率・束縛理論）からミニマリストプログラムへと理論的枠組みの大きな変化があった。新たに出てきたものは、詳細な理論というよりリサーチプログラムというのがふさわしい大枠だったようだ。このような状況で日本の生成文法研究者はどのような対応をとったのかは、科学的にも興味深い問題であろう。生成文法は筆者の全くの専門外だが、後学・後進・後世のために匿名情報提供者からの貴重な情報を、随所で表現を借りつつ筆者なりにまとめておく。以下では、伝聞をマークする表現がなくとも伝聞と理解されたい。

ミニマリストプログラムが登場し、理論全体を極小にするという目的・題目のもと、定義の不明確な概念・理論装置が理論全体の設計に関する speculation とともにチョムスキーとその周囲の研究者によって示されるという傾向が以前にも増して強くなった（後述する文献学的・解釈学的一派が存在する一要因である）。これに際して理論基盤記述派の研究者が大きな困難に直面したことは想像に難くない。記述の道具として使っていたGB理論は

公式に過去のものでされてしまった一方で、新たに道具として使えるほど細部が明示的に作り込まれた枠組みは示されないまま 20 年以上が経ち、現在に至る。この状況下、理論基盤記述派の大多数は、独自に道具を作成したり、与えられたものを記述に使えるまで精緻化したりはしていない。そのようなことに興味が無いからなのか、それができるほど抽象的思考能力が高くないからなのか、あるいは、道具とは子供向け「自由研究」工作キットのごとく、あらかじめ外から与えられ、カスタマイズの可能性まで決められているものだというマインドセットがあるためかもしれない。少数の者はきっぱりとミニマリストプログラムを見限ったが、他の多数は、あまり理論の変遷についていなくなった者～新しい用語を散りばめて理論を追っているふりをしつつ、内実はほぼ GB 理論のままで理論基盤記述を続けている者が連続体を成している。研究者として GB 理論からミニマリストプログラムへの変転を経験した世代の日本の生成統語論研究者の大半がこれに含まれる。

理論を追っているふりをするのは容易ではない。あまりに曖昧なチョムスキーらの言説に拠りつつ、新たに出された曖昧な概念を GB 理論と整合するように自分なりに解釈するということは、理論全体を通して突き詰めてものを考えることを専門技能としない理論基盤記述派には荷が重すぎた。整合性のある解釈にたどり着けなかった結果、細部を詰めて考えようとするすぐに破綻が露見するようなわけのわからないことが百家争鳴されるようになった。これが常態化し、それを是正するような動きも出ていない現状である。多数派となったそのような理論偽装的研究には、理論的な道具を用いている分だけ抽象度の高い一般化ができる可能性があるという利点はある。その一方で、理論的仮定に無理があるのかさえ分かりかねるようなことを無責任に言っても批判されないという状況になっているのは大きな問題である。他にも、ほぼメタ的なことに関してしかアウトプットを出さない評論家的存在になった者、チョムスキーの著作の文献学的・解釈学的研究を行うようになった一派などもいる。どちらも理論構築派とは言い難い。

生成文法研究者の中でもチョムスキアンと言われる主流派の状況は情報提供者によると以上のものであり、別の生成文法研究者もこれを認めている。主流派理論から離れつつ、チョムスキー流ではない生物言語学を発展させようという研究者は例外的な存在のようである。もちろん、全ての生成文法研究者がチョムスキーの枠組みに従って研究をしているわけではなく、ジャッケンドフのような「非主流派」あるいは「傍流」と自称する者たちもいる（両者の詳しい違いは郡司隆男によるジャッケンドフ 2002/2006 の訳者あとがきなどを参照）。両者の理論を窪田（2019）は次のように特徴付けている。

現在の理論言語学研究においては、片方の極に、理論研究における妥当性の 3 分類（抽象度が低い順から高い順に、観察的妥当性、記述的妥当性、説明的妥当性）のうち、**説明的妥当性**を偏重する（つまり、根本原理の探究を至上命題とする）生成文法的主流のアプローチがあり、その対極に、**観察的妥当性**により重きを置く（つまり、まず

は観察される事実をできる限り正確に整理して捉えることを当面の目標とする) 傍流の理論がある。(p. 274、強調原文)

そのため、主流派と非主流派では理論基盤記述派と理論構築派の割合が違うのではないかと思います、日本における非主流派の状況にも詳しい上の情報提供者にたずねてみたところ、昔は両者の中庸を行くような研究が多かったが、今は研究者が少ないことと傍流の中で中心的だった理論が活発でなくなったことのために、はっきりとしたことは言い難いとのことであった。

4.1.3 ま と め

以上から、「記述」を前面に出す研究、認知言語学、国語学、生成文法のいずれの学派においても、理論の構築・改良をする研究者は少数派であるようだとと言える。さらに、言語学の他分野についても、本稿のものと非常に近い関心から企画されたワークショップ(吉川他 2017: 88)で報告された調査によると、同様の傾向が見られた。この調査は、社会言語科学会第1回から第37回大会までの発表全てが理論研究かどうかを、吉川氏はその題目を見て主観的に判断し、各回の理論的研究発表の比率をまとめたものである。そのグラフを見たところ、理論系研究発表が10%を超えたことは初期の2回しかなく、その後5%前後になり、近年は更に減少して0%のことも珍しくなくなった。総じて言語学の理論的研究は絶滅の危機に瀕しているといっても過言ではないだろう。

学派以外にも言語研究者を分類する軸はいろいろあり得るものの、本稿にとって最も関係があるのは、興味の中心が言語現象・事例にあり、それを記述することを研究の中心に据える者か、言語現象を分析する枠組みに興味の中心があり、それを構築・改良することを研究の中心に据える者かという分類である。両者の極は、少々大袈裟に言えば、昆虫採集家と哲学者くらい異なる。前者にとっては現象・事例が主で、理論・枠組みは、いわばそれをより面白く堪能するための道具にすぎない。一方、後者にとっては主従が逆で、現象は理論・枠組みを鍛錬するためのものである。ここで紛らわしいのが理論を使うこと、つまり理論を使って記述することに興味がある理論基盤記述派である。三宅の分類では「理論」派に含まれるこのグループは、理論基盤の記述的研究を行っているのであって、理論をより良くしようとして現象を分析する理論構築派とは区別されることは繰り返し強調しておきたい。両者の違いは、喩えるなら車に乗ることが好きな者と、より良い車を開発することが好きな者の違いに対応する。筆者の見たところでは、言語学研究者の大多数は言語表現を観察するのが一番好きで、観察に使う理論、特にそれを使うことなく使ったり改良したりすることにはあまり興味が無いようである。これに関連して、分析に際して上手くいきそうな枠組みを選ぶという研究方針も耳にした。これは、理論を進展させる可能性よりも、首尾よく記述をする可能性を重視した方針と言える。理論の改良に一番の価

値を置く者は、少なくとも言語学においては学派を問わずかなり少ないようである。

4.2 記述派と理論構築派の緊張関係

Gigerenzer (2010) によると、心理学はデータがしばしば手段ではなく目的となる (p. 734) という点で言語学と同様である。理論の統合の必要性や大学院における理論構築法の教授法が論じられているこの論文では、心理学には包括的理論がないことが経済学者や物理学者からは驚きをもって迎えられることや、理論の統合の価値が認識されていないことはさらに驚くべきことだが、理論の統合を目的とみなす心理学者さえほとんどいないということが述べられている (p. 734)。これらの点で言語学は心理学よりさらに遅れていると言わざるを得ない。理論の統合といった高度なことは言語学で聞かれることはほぼなく、三宅 (2017) によると多数派である「記述」派にとっては理論の価値さえ認識されていないかもしれないし、複数の理論の統合はおろか個々の理論の構築さえ目的だと考える者は少ないかもしれない。記述志向の言語研究者は、多数派であるということもあり、理論志向の研究に対して「思弁的」「哲学的」などとレッテルを貼り、意義を認めないことが少なくない。たとえば、大学院生が理論志向の研究をすることを指導教員からディスカレッジされたということを直接聞いたことは一度ではない。筆者自身、理論的研究に対して、「一つ一つ、実例を挙げ」云々という査読コメントが付いて閉口したこともある。¹⁰ 挙げよと言われた実例とは、論文の仮説に合致したものであろう。自らの仮説に合致した実例を列举していくことは、Wason (1960) の実験において正解に辿り着けなかった枚挙帰納法 (enumerative induction)、枚挙思考 (enumerative thinking) の現れである。反証しようとしている仮説の反例として、作例でなく実例を複数挙げることに意義があっても、仮説に従う例として実例をずらずらと挙げることの意義は、理論的観点からは見出し難い。

多数派は査読などにおいて有利であり、査読や研究指導によって少数派を直接抑圧することも可能であるため、記述志向の言語研究者と理論構築志向の言語研究者の単純な人口比以上に、記述志向の発表が多くなっている可能性もある。そうなると、理論構築志向の研究が同じ志向の初学者の目に留まることも少なくなる。このような記述研究バイアスの結果、理論的研究はますます先細りになってしまうことが懸念される。両派の意見の相違は、結局のところ価値観—認知的に言えば何に高い関連性を感じるかという認知システムの個体差—によるものであり、埋めがたい溝がある。なぜ記述志向の言語研究者が学派を問わず多いのかは、他分野の状況がわからない現状では憶測さえ難しい。もしかしたら、作例やコーパスデータは科学のデータの中では極めて収集コストの低いものであるために、データを愛で戯れるのが好きな者が言語学に集まっているのかもしれない。

以上、本節では、分析成功報告が主流となっている原因として、そもそも理論構築派の言語研究者が少ないということを述べた。本節を終えるにあたって、少数派である (自称) 理論構築派¹¹の立場から、理論の改善を視野に入れない記述的研究 (理論基盤記述研究を

含む) について考えるところを述べておきたい。言語は少なくとも表面上は極めて複雑かつ多様な現象である。世界には数千の言語があると言われていて、1つ1つの言語には方言、レジスター、個人差、時代差など数限りないバリエーションがある。そしてバリエーションの1つ1つに音声・音韻・形態統語等様々な側面がある。文学の文体研究を含めれば、個人レベルを含む全てのバリエーションが分析・記述の対象とされているものの、このように複雑で多様な現象を人力で分析・記述を尽くすことは人類全員が言語学者になっても不可能である。記述し尽くすようなことはそもそも意図されていないのかもしれない。重要な部分を優先して記述するとしても、何が重要な部分であるかを客観的には決められない。実際には研究者にとってのデータへのアクセスしやすさや、分析に使いたい理論で分析しやすそうだというような理由から記述対象が決められることが多く、明確なゴールに向かって体系的・網羅的な記述が行われることは、フィールドワーカーによる危機言語の記述以外では少ない。記述し尽くすことがゴールだとしたら、中長期的な方略としては、人間の言語学者が記述の枠組みとなる理論を作り、それに則ってコンピュータが言語を記述できるようにして、記述はコンピュータに任せられるようになればゴールが見えてくるだろう。もっとも、この筆者の提案に賛同するような言語研究者は少なそうだ。多数派の言語研究者にとっては、記述することが目的だからである。言語・方言の大多数が滅亡する日までに両派が理解し合えることはあるのだろうか。

5 理論の進歩に資する研究とはどのようなものか

言語研究者が各々どのような研究を行うかはともかく、どのような研究が言語理論の進歩に貢献する研究なのかは共有されているべきであろう。しかし、それが表立って議論されることは少ない。この点を論じていて大いに参考になるのが、現日本言語学会会長兼国立国語研究所所長による現代日本語文法研究についての展望論文(田窪 1998)である。20年以上前に書かれたものではあるが、学界の状況は特に変わっておらず、今日でも全く価値を失っていない。以下では、これを紹介しつつ、どのような研究が言語理論の進歩に資するのかを考えていきたい。

5.1 語法研究

田窪が目にした研究の多くは語法研究、つまり語彙項目や具体的な表現の使用規則に関する記述的論述であった。語法研究は、典型的には表現の多義性や複数の表現の類義性を問題にする(一通りにしか用いられない表現を1つ取り上げただけでは論文にならない)。つまり、「特定の言語表現を取りあげ、その用法を分類し、共通する意味を取りだすもの、あるいは、複数の類似した言語表現に焦点をあて、その相違点を記述する」(p. 33)ものである。日本語に関するこの類の研究が応用日本語学的な(つまり、日本語教師の養成を主たる目的にする)学科に属する研究組織で多く行われているということは今日でも変わり

がない。その背景には、たとえば後述の「の」と「こと」の使い分けといったような日本語学習者にとって習得が難しい点をわかりやすく説明できるようにしたいという教育上の養成がある。こういった研究は、研究成果を言語学に明るくない学習者にも伝達することが意図されているためか、「多くの場合は、用法を直観にもとづいて分類、整理しているにすぎず、従来の、辞書、文法書の言いかえを越えない」(p. 33)というきらいがある。三宅(2017: 77)が言う通り、日本語教育という「実用のためには、精度の高い記述があればよく、抽象的な説明は不要と考えることには、ある程度の合理性があると言え」ことは確かだが、それだけでは言語学の研究として充分ではない。¹² 田窪(1998)は、こういった研究に対して、理論的基盤なしに「いくつかの語彙を恣意的に取りあげ、その語彙を記述するためだけに作った直観的記述を一つの独立した論文として扱うことには、抵抗を感じる」(p. 31)と手厳しい。その理由は、以下のように雄弁に語られている通りである。

特定の語、構文を取りあげて、その用法を分類することが日本語という一言語の特徴、ひいては、言語そのものの特徴の解明にどのような寄与をするのかは、あまり明らかではない。その語、その構文の用法の分類は、説明されるべき現象の提示であり、説明の対象を構成するだけである。それらの形式がなぜ複数の振る舞いをするのか、複数の形式がなぜ重なり合う分布をするのかを、分類に使った基準より少ない数の基準で説明するか、あるいは、別のすでに一般的になっている基準から導出するか、ができなければ一般化とはならない。(p. 34)

そういった研究は上手くいっても説明対象を提示する段階で終わってしまうのである。また、田窪は、語法研究は日本語教育・辞書作成には重要で、理論研究の材料を提供するとともに述べているが、誰もがアクセスできる形で研究成果が集積されることが必要だと指摘している(p. 37)。集積されない場合、知見がただ忘れ去られることになってしまう。もっとも、この点は理論的研究の成果であっても大差ない。集積する一つの方法は、研究成果を公開のデータベースの構築であり、周知のように既に国立情報学研究所による CiNii (<https://ci.nii.ac.jp>) などがある。もう一つの既存の方法はレビュー論文によるものである。しかし、日本の言語学においては、田窪(1998)のような広い分野の展望論文が学会誌に数年に一度掲載されることはあっても、特定のテーマについての研究のサーベイが学位論文の中にではなく、独立した論文として書かれることは、多くないだろう。レビュー論文自体は人類に新しい知識をもたらすものではないものの、その後の知識の拡大を促進するものであり、有益である。これは、将来知識を効率的に使えるようにするために知識を再編成しておくことは、それ自体認知効果をもたらさないものの、将来の認知コストを節約するという点において関連性がある(Van der Henst and Sperber 2004/2012)ということと同様である。研究という営みがアカデミア全体で分業して行われるものであることを考慮す

ると、文献を渉猟するのが得意な研究者によるレビュー論文も原著論文と並行して広く受け付けられるようになることが望ましい。

5.2 明示的・記述的一般化と説明

5.2.1 明示性・一般性を欠いた例

では、語法研究・記述的研究によって得られた研究の題材を理論研究が理論化するという理想的な連携はどのようにして行われ得るのだろうか。まず、記述的研究が明示的な記述的一般化を行う必要がある。それがどのようなものであるかをわかるには、そうでないとされるものを知るのが近道である。田窪（1998）が「記述、観察ともにすぐれたもので、学ぶところが多い好論文」と評しつつも槍玉に挙げているのは、補文の終わりの「の」と「こと」を比較した大島（1996）である。その結論には、「「こと」は、当該の事象のあらましを文の形であらわしたものの、「の」は当該の事象の全体をとらえそれを文の形であらわしたものの」とある（p. 66）。しかし、「事象のあらまし」、「事象の全体」が定義されていないため、両者の内実は推測するしかなく、明示性を欠くと田窪（1998: 34）は批判している。その問題が露呈している部分を1つ挙げておく。「親友を裏切る こと／??の だけはするな。」や「戦時中、自分の手で人の命を奪うという こと／??の をしてからは...」（大島1996: 50、容認性判断も大島による）のような機能動詞の例に対する次の説明である。

機能動詞結合において、機能動詞（上の例では「する」）は実質的な意味が希薄で、もっぱら文法的な機能のみを担う。そして、実質的な意味は直前の名詞句が担う。逆に言えば、直前の名詞句が表わすのは実質的な意味のみ、つまりある事象の事実関係のみ——あらまし——である。すでに述べたように「こと」は事象のあらましを表わすと考えられる。言い方をかえれば、「こと」の導く補文は、事実関係の骨組みだけを表わすと考えるのである。それゆえ「こと」は機能動詞結合に問題なく現われる。他方、「の」のとり補文は後述するように、ある事象の全体をとらえるものであり、事象のあらましのみを表わすものではない。それゆえ機能動詞結合には現われ得ないのだと考えられる。（p. 51）

どうやら実質的意味≡事象の事実関係≡事象のあらましであるようだが、その内実がこの言い換えから十分に明らかになっているとは言えないため、説明が不明瞭なものとなっている。当然、このような説明は反証可能性が低いという問題もある。

興味深いのは、大島自身が先行研究の橋本（1990）を同じような趣旨で批判しているということである。橋本は補文化辞に「こと」しか使えない述語は補文に「生産されることがら」という意味役割を付与すると主張している。この主張に対して大島（1996）は、「命じる」「必要だ」のように補文が「生産されることがら」とは考えられない例を挙げ、以下

のように批判している。¹³

このように橋本(1990)でいわれている「生産されることがら」は、実はかなり性質の異なったものを一つにまとめたものであると思われる。さらに、この「生産されることがら」が何らかの統語的・意味的テストによって明示的に規定されるのか否かも明らかにされておらず、意味役割の設定の仕方に疑問がある。(p. 49)

つまり、「生産されることがら」も、「定義されていないため、本文の記述からこちらで内容を推察するしかない概念」(田窪 1998: 34)だということになる。もっとも、橋本(1990: 107(6)、103(10))は、《生産されることがら》、及びそれと対立する《対象となることがら》を、対立する《生産物》《対象》という文ではなく普通の名詞句が述語に対して持つ意味役割の下位類と位置付けているため、《生産されることがら》と《対象となることがら》は「アドホックな(そのためだけの)概念」(田窪 1998: 34)とは言い難い。大島(1996)は、橋本(1990)を的確に批判しながらも、田窪(1998)の批判が正しいとすれば、同じ轍を踏んでしまっているのである。Mercier and Sperber(2017: 12章)によると、人間の理性には確証バイアスとは逆の偏りもあり、議論を批判的に検討することは他人の議論に対して行う方が得意なのである。

田窪(1998: 34)は、大島説は補文の終わり以外の「こと」「の」に当てはまるかどうか不明で一般性を欠くため、今後の発展に資するところが少ないとも述べている。実際は、大島(1996)は「の」について「ある事象の全体をとらえるものとすれば、「の」を含むこの他の構文も統一的に扱える見通しが生まれてくる」(p. 65)と述べ、接続助詞的な「のを」と文末の「Sのだ」について最後に触れている。また、他の用法についても、「本稿の記述は多くの場合に何らかの形で応用できるものと期待できる」(p. 66)とも述べている。どちらに関しても「の」の「事象の全体をとらえる」ということが不明瞭なのが災いして、それと他の用法との関わりが筆者には率直に言って推測もできなかった。

5.2.2 明示的な記述的一般化はあっても説明を欠いた例

田窪(1998)は「明示的な記述的一般化がなされている点ですぐれた論文」(p. 35)といえる研究の例として、江口(1998)を挙げている。そこでは、引用節と内容名詞句、あるいは間接疑問節と内容名詞句が共起する構文が扱われている。たとえば、「どのくらい集まったのか、参加人数をたずねた」(p. 327)は間接疑問節と内容名詞句(「参加人数」)が共起した例である。そして、このような構文について、「記述B: 節と名詞句とが一つの意味役割を共有している場合は、節が前、名詞句が後ろに位置しなければならない」(p. 331)という興味深い記述的一般化が得られている。¹⁴ しかし、「なぜ、「節一名詞句」という語順でなければならないのだろうか」(p. 340)と、一般化に対する説明は与えられないまま

論文は終わっていて、田窪（1998）はこの点で「論文としての価値は減ぜられる」（p. 35）と評価を下している。

上の例のような間接疑問節と潜伏疑問名詞句が同じ意味役割で共起する構文の語順に対して、筆者は左方転位構文という明示的・一般的概念により説明を試みたことがある（山泉 2008）ので、説明の例として我田引水しておく。簡単に言うと、この構文は左方転位構文（Lambrecht 2001, Westbury 2016）の一種で、間接疑問節が左方転位位置にあり、それを潜伏疑問名詞句が続く節の中で代名詞的に照応している。従って、両者の語順は左方転位構文という一般的な構文の統語論が、「左方転位要素が照応要素に先行する」と規定していると説明できる。そして、「節—名詞句」の語順であって逆ではない理由も、「話題の指示対象の語彙的表示は指示対象の命題の項としての役割を表すものとは別に現れる」（指示・役割分離の原理＝the principle of the separation of reference and role, Lambrecht 1994 : 185）という普遍的傾向と、それを実現するのにふさわしい表現という観点から説明が与えられている。変項を含んだ命題を提示するにはそれをアイコンニックに表す間接疑問節がふさわしく、それを述語の項として意味役割を伴って表すには、項として一般的な形である名詞句がふさわしいと考えられる。さらに、この構文を左方転位構文の一種と考えると、この構文がそもそも「1つの叙述において同じ意味役割が2度埋められてはならない」という基本的な意味論的適格性条件（Lambrecht 2001 : 1067）に違反して不適格とならない理由も説明できる。¹⁵ 以上は記述的研究と説明を試みる研究の連携例と言える。

5.2.3 明示的・一般的概念による理論的研究

他にも田窪は、明示的かつ一般的な概念・理論装置による分析の一例として、西山（1996）を挙げている。「Aが増える」という構文の多様な解釈を「驚くべき用例作成能力」（田窪 1998: 34）によって明らかにした研究である。たとえば、「鈴木の研究している細菌が増えた」（西山 1996: 50）は以下のような解釈があるとされる。百聞は一見に如かず。長くなるが引用しておく。

1. 対象自体の内部変化の読み：「Aを指示的名詞句とみなし、その指示対象自体の内在的变化を数や量の側面からとらえる」（p. 49）

鈴木の研究している特定の細菌が繁殖した。

2. 変項名詞句 A の変項に入る値の個数の変化：「Aを指示的名詞句とみなさず、[...] 変項名詞句[...]とみなし、その変項を埋める値が、時間軸にしたがって入れ替わり、それぞれの値をその個数という観点で比較してみると、小から大へ変化した、と読む」（p. 54）

(i) 値の入れ替えに伴う、下位種レベルでの個数の増大

鈴木は以前よりも多くの種類の細菌を研究するようになった。

(ii) 値の入れ替えに伴う、個体レベルでの個数の増大

鈴木は、細菌研究所の研究員である。鈴木の研究対象であるペスト菌は、鈴木の実験室の棚のシャーレに保管されている。昨年の秋、所長が、「この細菌も研究してくれ」、と言って、(ペスト菌の入っている)別のシャーレを持ってきた。それ以来、鈴木は忙しくなった。鈴木の研究している細菌が増えたのだから当然であるが……。(p. 51)

3. 場所空間を占める A の個数の変化

(i) 集合 A のメンバーが、限られた場所空間を占める数の変化: [X が、限られた場所空間 L を占める、集合 A の個々のメンバーである]、そういう X に入る値の数が時間軸にしたがって、小から大へ変化した」(p. 63)。「A」自体は変項名詞句ではないが、A を主要部とする、より大きい名詞句が変項名詞句として機能している」(p. 62)。

鈴木は細菌研究所の研究員である。鈴木が研究している細菌は、A、B、C、D、E、F、G という別個のシャーレに保管されている。(これらは、同一種類の細菌であっても、互いに異なる種類の細菌であっても構わない。) あるとき、研究所全体で、学問的に注目すべき細菌だけを取り上げて、研究所全体で検討する実験集会が行われたとしよう。どの細菌が取り上げられるかは、所長の判断であり、どの研究員にも事前に知らされていないとしよう。さて、実験の開始時には、テーブルの上には、他の研究員の研究している細菌とともに、鈴木が研究している細菌である A と B が置かれていた。が、そのうちに、C と D が追加され、そして時間の経過とともに、E と F も、さらには G までも、学問的に注目すべき細菌として、テーブルの上に置かれはじめた。その有り様をじっと見ていた研究員たちは、「鈴木の研究している細菌が増えたね」と言って互いに顔を見合わせた。(pp. 51-52)

(ii) タイプ A の instance が、限られた場所空間を占める数の変化: 「A が特定タイプ A' を指示し、[X が、場所空間 L を占める A' である]、そういう X に入る値の数が時間軸にしたがって、小から大へ変化した」。(pp. 66-67)

鈴木は病原性大腸菌'[sic.]O-157'を研究している。病原性大腸菌'[sic.]O-157'は、以前は非常に珍しいものであったが、近頃、日本では、衛生状態の悪化のためか、この菌に出くわすことが多くなった。つまり、鈴木の研究している細菌が増えてきたわけだ。われわれ細菌学者は、その原因の究明を急がなければならない。(p. 52)

田窪(1998)が高く評価しているのは、以上の解釈の分析に「変項名詞句」「指示的名詞句」¹⁶といった概念が一貫して用いられている点である。これらの概念は、定義が厳密で外延が明確であるため、誰でも利用可能である。さらに、これらはコピュラ文、存在文、変化文、「同じ」「違う」の意味解釈などの伝統的な言語学・哲学の問題と密接に関係している(西山 2003、2013 など)ために一般性もあると言える。そのような概念によって「A

が増える」構文について、A の名詞句の内部構造と可能な解釈の関係を分析しているため、この研究は単なる語法研究にとどまらず、理論的主張を含んでいることになる。

なお、西山（1996）では、コーパスからの実例が全く用いられておらず、記述志向の研究者はそこに難癖をつけるかもしれないが、コーパスを探しても上で挙げたような多様な解釈の用例全てが見つからないということは大いに考えられる。日本のインターネット黎明期であった 1996 年に出版された西山論文執筆の時点ではなおさらである。理論研究において実例は万能ではない。

5.3 競合仮説との比較

確証バイアスとの関連で述べた通り、データに適合する仮説は通常複数ある。その中からどれを選ぶべきかは言語学に限らず科学一般においてしばしば難しい問題であるが、理論的研究においては避けて通れない。筆者が出席した日本認知言語学会では、先行研究の非認知言語学的枠組みでは上手くいかないことを指摘し、認知言語学的枠組みで上手くいった分析結果を報告した萩澤（2019）、佐藤（2019）のような発表が見られた。このような発表は、競合する枠組みのどちらの妥当性が高いかという議論に資するものであるため、前述の分析成功報告の問題がない。その点は枠組みを 1 から作る研究も同様であるが、前述のコストパフォーマンスという観点では、このやり方が最も効率的・現実的だと言えるのである。

競合仮説の比較という点に関して田窪（1998）が「卓越した分析理性を目の当たりにすることができる」（p. 36）と激賞するのが黒田成幸（1998）であり、以下のように評されている。

この論文で黒田は、可能な分析をほぼ網羅的にあげ、そのうち実際に論文として提出されているもの、および、論理的に可能なものとを吟味して、最終的になぜ自分の分析がより優れているかを議論している。自説がどのような前提を必要とするか、その前提がどのように一般言語学的にいつて適切であるかまでを見通した論文（p. 35）

この論文では、最初に諸説を紹介し、以下のように階層的に分類している（それぞれの説の支持者の名前は黒田以外省略）。

A 名詞句説

1. 純内在説（外在主辞不在説）
 - 1.1 名詞化説〔黒田〕
 - 1.2 非名詞化説
2. 空主辞説（空主辞存在説）

2.1 空所説

LF 移動説

2.2 空範疇説

2.2.1 無標示空範疇・無移動説

2.2.2 共標示空範疇・表層移動説

2.2.3 外置説（外置関係節説）

B 副詞句説

そして、階層の上から、まずはB副詞句説から順に自説と異なる説を退けつつ自説の優位性を主張している。理論の優劣を客観的に比較するにはメタ理論が必要となる。メタ理論についての議論は非常に抽象的であるため、チョムスキー（1965/2017: 7 節）のように正面切って議論されることは稀であるけれども、必要であることは間違いない。

5 節のここまでの議論を、本稿の草稿を読んだ黒田航（p.c.）がわかりやすく要約してくれた。それをもってまとめとしたい。

1. 記述モデルのない人にはデータを適切に評価できない。
2. 理論のない人は記述を適切に評価できない。
3. メタ理論がない人は理論を適切に評価できない。

紙幅制限バイアス

黒田（1998）のような周到な議論をするには紙幅を要する。この論文は79ページあり、日本における言語学の論文としては特大サイズと言える。日本の言語学の主要な学会誌でこれを許容するものはなさそうである。たとえば、黒田の論文に最も適合すると思われる日本語文法学会の『日本語文法』は、投稿要領（<https://www.nihongo-bunpo.org/journal/contribution/>）によると研究論文の分量はわずか「16 ページ以内（400 字詰め原稿用紙 40 枚以内にほぼ相当）」で、黒田論文のような本格的な論考は望むべくもない。理論的研究は、著者の理論・先行理論の紹介・比較などを含むため、どうしても紙幅を要するのである。長い論文は査読の手間がかかるという問題はあるものの、紙媒体から電子媒体への移行が進みつつある今日においては、分量の制限を緩和してもよいのではないだろうか。なお、紙幅の問題で本格的な論考が世に出にくいということは日本語の学術的書籍の出版についてもあてはまるかもしれない。英語では、浩瀚な学術書が教科書を含め多数出版されている一方、日本語では、少なくとも言語学に関する限り、浩瀚な学術書の多くは訳書である。このような厳しい紙幅の制限は、研究を小粒なものにするバイアスをかけているだろう。

6 師弟関係バイアス

上に述べた通り、理論研究を進展させるには、複数の枠組みの視点が不可欠である。現

象 P が上手く分析できなかった枠組み F を P が分析できるように改訂するという方法においても、枠組み F とその改訂版 F' という複数の枠組みが問題になっている。言うまでもなく、F' は厳密には F と同じではなく、チョムスキーの理論のある時期のもの（例えばチョムスキー 1957）と次の時期のもの（チョムスキー 1965）のような関係にある。なお、チョムスキーの理論はコロコロ変わると批判されることがある。例えば、町田（2000）は、最後の節「理論がころころ変わりすぎるぞ」において、「ま、いろいろと研究が進んだ結果理論の内容が変わるということはあるでしょうから、変わったというだけでは別に悪くないんだろーと思います」（p. 201）としつつも、「やっぱり、理論として安心して使われるためには、その根幹の部分が正しいことはまず疑いえない、という性質が必要なんではないでしょうか」（p. 203、下線は引用者）と、理論の使用者の視点からコメントしている。また、金谷（2002/2013）は、修正され続けていることを理由にチョムスキーの理論を極めて激しく攻撃することで理論というものに対する無理解を露呈している。¹⁷

振り返れば、1957 年以来、「標準理論」→「拡大標準理論」→「改訂拡大標準理論」→「GB 理論」→「X バー理論」→「ミニマリスト理論」などと誠に目まぐるしくチョムスキー理論は修正されてきた。それは、例えば三上章やマルチネの構文論が、基本線では初めからほとんど変化していないのと極めて対照的である。こうした理論のたび重なる修正の軌跡はチョムスキーにとって決して名誉なものではあるまい。それはこの言語学者の理論に内在する、「理論の正しさが実証できない」という性格に致命的に由来する修正なのだ。軌道修正の連続というこれまでのチョムスキー理論の来し方自体が、それまでの理論は不十分あるいは誤った仮説であったことを雄弁に物語っているのである。（pp. 154–155、振り仮名を省略）

本稿での議論から明らかなように、前の理論よりも悪くなったということに対してではなく、理論が変転し続けること自体に対する批判は不当である。¹⁸ 不当な批判の背後には、枠組みはあたかも天から降ってくるようなものであり、仮説ではなく反証される可能性も変える余地もないものだという理論観（田中太一、p.c.）があるのかもしれない。このような研究態度には、理論は使いながら変更を検討していくものであるという発想がそもそもないし、理論の改良をもたらす可能性もない。

理論の進歩の仕方に対するこのような無理解以外にも、理論の改訂を阻害し得る社会的要因がある。研究者の間の社会的力関係・人間関係、特に師弟関係である。そもそも仮説は、反証され新たなものに改訂されることによって、相対的な信頼性を高めていく。科学の進歩には、先人による既存の説を否定するプロセスが不可避なのである。先人には当然、研究者と直接的な関わりのある「先生」も含まれる。非常によくあることだが、大学院生 α が用いている枠組み F が α の指導教員 β （あるいは β の元指導教員 γ ）の作ったものだと

しよう。 α がFに問題を見つけた場合、 α がFの改訂版F'を考案し、それを提示した論文を発表することは、科学の進歩という観点からは全く正当であるものの、社会的な理由から α がそれをためらいがちであることは多くの者が認めるだろう。 β 先生は α の博士論文として、F'の提案よりもFによる分析成功報告を歓迎するのではないかと α はF'を提案する研究を公にできないのであれば、F'を考案しようとしなくなるだろう。指導教員が自分の支持する枠組みによる論文を査読することは、前述の確証バイアスのために批判的に読むことが難しくなるという弊害もある。(Mercier and Sperber 2017: 213 は、確証バイアスは味方バイアス (myside bias) と理解するのがより適切だと言っている。) ¹⁹ さらに、Fと競合する枠組みGの優位性を示す研究を α がしたとしたら、 β 先生に歓迎されるどころか疎まれるのではないかと。博士論文の審査委員会に、Gの支持者がいた場合はなおさらである。ここでは社会関係の影響が最も強く働くと思われる師弟関係だけを考えたが、対等な力関係にあって同じ理論的枠組みFで研究をしている研究者サークルを考えても、一人の研究者が独自に $F \rightarrow F' \rightarrow F'' \rightarrow F''' \rightarrow \dots$ と理論の改訂を重ねていくことは、仲間との学問的コミュニケーションを難しくするとともに、和を乱し輪からの孤立につながりかねないことは否めない。分析成功報告は、理論の進展につながらないためにこのような社会的軋轢を引き起こさない。そもそも、「日本語研究者の場合で言うと、特定の言語理論に精通することが、必ずしもポストを得るために有利に働くわけでは」ない(三宅 2017: 85) とすれば、理論的貢献をしない研究者や理論に基づいた研究をしない研究者に対して淘汰圧は働かない。分析成功報告、理論基盤記述といった非理論構築的研究が主流になるのは人間社会において自然なことであろう。

このような好ましくない状況になることは、ある程度は言語学という「ソフトな」学問の性質によるものと考えられる(Fanelli 2010: 1 参照)ものの、そもそも α が社会的に優位な立場にある β の信じるFを否定しようとしなないことは、科学の進歩の妨げになってもそれ自体は人間社会において生きる個人として適応的であろう。先人の説を否定して科学理論を進歩させることは社会的生物である人間の性向に逆らう行いであるといっても過言ではない。言語学の理論的研究を阻害する他の問題については、他分野における取り組み(池田・平石 2016a、加藤 2018、Findley et al. 2016、Munafò et al. 2017 など)が大いに参考になるものの、このような人間の性向に根ざした問題に対する対応策はあるのだろうか。²⁰ 「社会」を自分の信じる真理に優先させないようにするという研究者の意識改革—自説を信じるのではなく自らの頭脳を信じるようにすること、自説の批判・否定を歓迎するようにすること—を科学哲学の知見の普及によって行おうとすること以外に筆者は思いつかない。確証バイアスも適応的意義があると考えられるのに科学の進歩を阻害するものであった。科学を行う人間は自然 nature に挑むだけでなく、自らの性向 nature にも打ち勝たなければならないのだろう。

7 おわりに

本稿では、さまざまなバイアスが言語の理論的研究を阻害することを検討してきた。問題は錯綜しているが、これらの関連を検討する余裕はなかった。最後に、それらのバイアスをまとめておく。

- 確証バイアス・味方バイアス
- バブ리케이션バイアス、特に肯定的結果バイアス
- 記述研究バイアス
- 紙幅制限バイアス
- 師弟関係バイアス

言語学においてこれら全てに対して有効のある対策を取ることは特に個人では難しいけれども、研究をするにあたってこれらを自覚しておくことは無駄ではないだろう。本稿の終え方も田窪（1998）に倣うことにする。妄言多謝。

註

*本稿は、文部科学省の科学研究費（課題番号：17K17842、「コピュラ文名詞句の解釈多様性を扱える認知語用論の構築」）の助成を受けて行われている理論構築を主とした研究の副産物である。本稿執筆において、多くの人々、特に以下の方々（敬称略）に有益なコメントをいただいた：氏家啓吾、太田陽、黒田航、田中太一、萩澤大輝、星浩司、吉川正人。

¹ 言語の理論的研究の目的・議論の組み立て方・方法論などについては、日本語の統語論を題材として生成文法の立場から書かれた窪田（2019）が大いに参考になる。ただし、窪田（2019）は、理論的研究をあえて狭く規定して、仮説検証の手法に従った研究だけを扱っている（pp. 260–261）。そのため、「この規定では認知言語学研究の大半が理論言語学から外れてしまう」と述べている。

² 故あって他の動物では知られていない（Mercier and Sperber 2017: 217）。

³ 実際のインストラクションは以下の通り。“You will be given three numbers which conform to a simple rule that I have in mind. This rule is concerned with a relation between any three numbers and not with their absolute magnitude, i.e. it is not a rule like all numbers above (or below) 50, etc. Your aim is to discover this rule by writing down sets of three numbers, together with reasons for your choice of them. After you have written down each set, I shall tell you whether your numbers conform to the rule or not, and you can make a note of this outcome on the record sheet provided. There is no time limit but you should try to discover this rule by citing the minimum sets of numbers. Remember that your aim is not simply to find numbers which conform to the rule, but to discover the rule itself. When you feel highly confident that you have discovered it, *and not before*, you are to write it down and tell me what it is. Have you any questions?” (Wason 1960: 131) そして、正解は、“three numbers in increasing order of magnitude” (p. 130) であった。

⁴ もう一つの興味深い実験結果は、自分の仮説が正解ではないとわかった後に、言葉を変えただけで数学的には等価な仮説を保持していた者が少なくなかったということである (p. 136)。言い方を変えただけで実質的に同じことが新たな仮説として提示されること、ひいては被説明項にラベルを付けただけの“説明”が言語学でも散見される。このような理論の代用物については、Gigerenzer (2010: 737–740) も参照。

⁵ 三宅（2017: 79–81）の所見では、「記述」を前面に出す現代日本語文法研究と認知言語学の間には、最初から今に至るまで、前者と生成文法との間よりも高い「壁」があるとのことである。筆者の印象では、後述するように壁の両側の多数派が行っていることに大差な

いように思えるためか、壁はあまり高いようには見えない。

⁶ 筆者が Turner et al. (2008) を読んだ限りでは、Turner らが調査した研究の中で、否定的結果の出たものは出版される割合が肯定的結果の出たものよりも低いということは確認されたものの、それがそもそも論文が執筆・投稿されなかったためなのか、投稿されても採択されなかったためなのかは不明であった (p. 259)。実験結果の肯否によって査読結果がどうなるのかを調べた研究には Mahoney (1977) がある。序論と実験方法の節が同一でその後が異なる実は架空の論文の草稿を大勢の査読経験者達に査読させるという興味深い実験の報告である。それによると、肯定的結果が出た論文(考察の節はない)は、否定的結果が出た論文(考察の節はない)よりも採否に関する総合評価が高かった。序論と実験方法の節だけの草稿は最も評価が高く、はっきりしない結果 (mixed results) が出た考察付きの草稿は最も評価が低かった。

⁷ この「査読者と投稿者のための指針」は、新たに設けられた「追試研究」「事前登録研究」「事前登録追試研究」に関するものではあるが、「意図して通常の「原著」「ショートレポート」にも該当するように記述した」(加藤 2018: 105) とのことである。

⁸ HARKing は、字義通りには、実験結果がわかった後に仮説を作ることだが、単なる帰納的推論は含まない。HARKing には多くのバリエーションがある。最も純粋なものは、実験結果が出た後に案出した仮説があたかも実験前から知られていたものであり、それを検証するために実験をしたかのように提示することである (Kerr 1998: 197)。言語学では以下の事情から HARKing という「疑わしい行為」が常習に行われているのかという疑問が出るかもしれない。容認性判断は理論言語学における実験と考えられるけれども、容認性判断の前に明確にあった仮説をテストするという形で研究が行われてから仮説—実験方法—実験結果—議論といった形式の論文にまとめられるということは皆無に等しい。例文の容認性を元に理論(仮説の集合体)が作られていくことが多い。しかし、言語学の論文の論述は、仮説(実際は後に提示されるデータの検討を元に案出されたもの)の提示→仮説の導く予測→予測通りのデータの提示という順で進むことも少なくない。たとえば橋本 (1990) の意味規則 II 「補文の意味役割が《対象となることがら》ならば「の」「こと」両用文になり、《生産されることがら》ならば「こと」専用文になる」(p. 108(5)) は、様々な動詞の補文に「の」「こと」が使えるか否かを検討することによって案出されたのだろう。橋本は意味規則 II を提示した後、補文に《生産されることがら》という意味役割を与えるタイプの動詞を挙げ、「意味規則 II によれば、これらの動詞を主文述語とする文は補文の意味役割が《生産されることがら》であることから、「こと」専用文になると予測されるが、以下の[...]例文がしめすように、実際にその予測どおりであることが分かる」(p. 107(6)) と、“予測”を“検証”している。これには問題があるのだろうか。

筆者の暫定的な考えでは、理論言語学の研究の多くは、HARKing が問題となり、かつそれが仮説の事前登録と results-blind/free review で予防できるようなタイプの研究ではなく、本文のこの後で述べているような質的研究・探索的研究に近い。窪田 (2019) のように、仮説検証の手法に厳密に従った研究だけを言語学の理論的研究と考える立場もある(本稿註1参照)ものの、そこでデモンストレーションされているようなタイプの研究においても、研究の過程においては容認性を判断しながら仮説が模索されることが多いだろう。また、論文が仮説→その反例→新たな仮説→…と進んでいく論述スタイルであっても、研究の過程に思いついた全ての仮説が明示されるとは限らない。ここで区別しなければならないのは、理論の構築のための実験と理論のテストのための実験である (Steinle 1997, Scholz et al. 2015: 3.5)。橋本 (1990) のような研究における容認性判断は、仮説を検証するための実験とは性質が異なり、例文の容認性を元に仮説を作っていくこと自体に問題はないと筆者は考える(池田・平石 2016b: 7.7 も参照)。とは言え、前述のような順の論述は HARKing をすると問題になる仮説検証型の実験を報告するためのものであるから、誤解を招き、好ましくないだろう。なお、HARKing の大きな問題である、多重比較の隠蔽による第一種の

過誤の発生確率の増大（池田・平石 2016a: 6）という問題は、容認性判断では確率を用いていないために生じない（その他の HARKing の問題など、HARKing について詳しくは Kerr 1998、Rubin 2017 参照）。以上に関して、太田陽氏に科学コンサルティングをしていただき、非常に参考になった。

⁹ もっとも、仮説検証型の研究が行われている心理学でも、池田・平石（2016a）のように、理論の弱さ（「前提となる知見の根拠が乏しく、また知見ないしは仮説間の相互依存性も少ないため、厳密な事前の予測が難しい」p. 4）のために、「現状の心理学においては、仮説検証型物語よりも、記述的研究によって新奇性を探索すべきだと考えられる」（p. 5）という意見がある。

¹⁰ こういった多数派の圧力に対する理論志向研究者からの怨嗟の声が表面化することは極めて珍しいものの、酒井（2012）はそれを聞く貴重な機会を提供している。

¹¹ 筆者は「指示参照ファイル理論」（Yamaizumi 2019b、山泉 2019c）という理論を独自に構築中であり、それとともに業界の見え方が変わってきた。

¹² もっとも、三宅（2017: 77）によると、現代日本語の記述的文法研究が「全て実用的な面を重視しているか」というと、必ずしもそうではなくなってきたと言わざるを得ないとのことである。

¹³ もっとも、橋本（1990: 111）は、論文の議論の対象を動詞述語の「が」「を」「に」でマークされた補文に限定していて、動詞述語以外の述語は注 8 で言及しているだけである。ただ、その注で橋本は、コピュラ文、形容詞文、形容動詞文のガ格補文について、「これらの文は、（感情述語の現在形を主文述語とする一人称主語の文、分裂文など特殊なものを除けば）「の」「こと」両用文になる」（p. 102）と述べていて、大島（1996）の挙げた「必要だ」はその一般化に対する反例となる。

¹⁴ 「さらなる一般化」として記述 C（p. 339）もあるが、問題が残るためか、江口（1998）は結論としては「記述 B」を挙げている。

¹⁵ 山泉（2008）では、西山（1996）でも用いられている「変項名詞句」という概念を用いてこの構文を特徴付けた。しかしその後、潜伏極性疑問名詞（山泉 2019a）という類の定義上変項名詞句にならないものが見つかった。山泉（2008）の一般化はこの点で修正を要する。

¹⁶ 田窪は「不飽和名詞句」と書いているが、「飽和」という表現は西山（1996）には見当たらないので、「変項名詞句」と対比される「指示的名詞句」のつもりだったと思われる。

¹⁷ 金谷（2002/2013）の引用部分についての詳しい批判は、田川（2007）を参照。

¹⁸ 前述の黒田（1998）も、黒田（2005）に収録されている版においては、初版の誤りを認めることを含め、多くの改訂がなされている。

¹⁹ 註 6 で紹介した Mahoney（1977）の実験において、仮説にとっただけではなく査読者自身の信念にとってもおそらく否定的な結果を報告する論文を査読した者の 71.4% が草稿の矛盾に気付いたのに対し、仮説・査読者の信念にとって肯定的な結果の草稿の査読者は、25% しか同じ矛盾に気が付かなかった（p. 170）。

²⁰ 確証バイアスへの対策として、人間の理性の長短を論じている Mercier and Sperber（2017: IV）が示唆に富む。

参考文献

Fanelli, D. 2010. “Positive” results increase down the hierarchy of the sciences. *PLoS ONE*, 5(4), e10068. doi: 10.1371/journal.pone.0010068

Fanelli, D. 2012. Negative results are disappearing from most disciplines and countries.

Scientometrics, 90(3): 891–904. doi: 10.1007/s11192-011-0494-7

- Findley, M. G. et al. 2016. Can results-free review reduce publication bias? The results and implications of a pilot study. *Comparative Political Studies*, 49(13): 1–37.
doi: 10.1177/0010414016655539
- Franco, A., Malhotra, N. and Simonovits, G. 2014. Publication bias in the social sciences: Unlocking the file drawer. *Science*, 345: 1502–1505. doi: 10.1126/science.1255484
- Gigerenzer, G. 2010. Personal reflections on theory and psychology, *Theory & Psychology*, 20(6): 733–743. doi: 10.1177/0959354310378184
- Giner-Sorolla, R. 2012. Science or art? How aesthetic standards grease the way through the publication bottleneck but undermine science. *Perspectives on Psychological Science*, 7(6): 562–571.
- Kerr, N. L. 1998. HARKing: Hypothesizing After the Results are Known. *Personality and Social Psychology Review*, 2(3): 196–217.
- Lambrecht, K. 1994. *Information structure and sentence form: Topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge University Press.
- Lambrecht, K. 2001. Dislocation. In M. Haspelmath et al. (eds.), *Language typology and language universals: An international handbook*, Vol. 2, 1050–1078. Walter de Gruyter.
- Latour, B. 2000. When things strike back: A possible contribution of ‘science studies’ to the social sciences. *British Journal of Sociology*, 51(1): 107–123.
- Mahoney, M. J. 1977. Publication prejudices: An experimental study of confirmatory bias in the peer review system. *Cognitive Therapy and Research*, 1: 161–175.
- Mercier, H. and Sperber, D. *The enigma of reason: A new theory of human understanding*. [Kindle edition] Penguin Books.
- Mita, H. Constructional and functional bases of figurative meanings of Japanese color expressions. *JCLA Conference Handbook 2019*, pp. 58–61.
- Munafò, M. R. et al. 2017. A manifesto for reproducible science. *Nature Human Behaviour*. 1, 0021. doi: 10.1038/s41562-016-0021
- Polo-Sherk, R. 2019. 「言語化のための思考整理—思考の区画化に関する提案—」 *JCLA Conference Handbook 2019*, 163–165.
- Rubin, M. 2017. When does HARKing hurt? Identifying when different types of undisclosed post hoc hypothesizing harm scientific progress. *Review of General Psychology*, 21: 308–320. doi: 10.1037/gpr0000128
- Scholz, B. C., Pelletier, F. J. and Pullum, G. K., 2016. Philosophy of linguistics. In Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2016 Edition).
<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/linguistics/>
- Steinle, F. 1997. Entering new fields: Exploratory uses of experimentation. *Philosophy of Science Biennial Meetings of the Philosophy of Science Association. Part II: Symposia Papers*, 64: 65–74. doi: 10.2307/188390
- Turner, E. H., Matthews, A. M., Linardatos, E., Tell, R. A., and Rosenthal, R. 2008. Selective publication of antidepressant trials and its influence on apparent efficacy. *New England*

- Journal of Medicine*, 358: 252–260.
- Van der Henst, J.P. and D. Sperber. 2004/2012. Testing the cognitive and the communicative principles of relevance. In D. Wilson and D. Sperber, *Meaning and relevance*, pp. 279–306. Cambridge University Press.
- Wason, P. C. 1960. On the failure to eliminate hypotheses in a conceptual task. *Quarterly Journal of Experimental Psychology, Section A: Human Experimental Psychology*, 12(3): 129–137.
- Westbury, J. 2016. Left dislocation: A typological overview. *Stellenbosch Papers in Linguistics*, 50: 21–45.
- Yamada, Y. 2018. How to crack pre-registration: Toward transparent and open science. *Frontiers in Psychology*, 9: 1831. doi: 10.3389/fpsyg.2018.01831
- Yamaizumi, M. 2018. Reconsidering the layered structure of the clause in Japanese. *EX ORIENTE*, 25: 47–89.
- Yamaizumi, M. 2019b. A cognitive-pragmatic account of specificational sentences. Paper read at the 15th International Cognitive Linguistics Conference.
- 秋田喜美. 2019. 「オノマトペの音象徴性再訪」 *JCLA Conference Handbook 2019*, 67–70.
- 天野みどり・三宅知宏・大木一夫. 2019. 「展望 1 : 記述的研究と教育的研究」『日本語文法』19(1): 90–97.
- 池田功毅・平石界. 2016a. 「心理学における再現可能性危機：問題の構造と解決策」『心理学評論』59(1): 3–14.
- 池田功毅・平石界. 2016b. 「池田・平石 (2016) 「心理学における再現可能性危機：問題の構造と解決策」に関する追加的ノート」 doi: 10.13140/RG.2.1.3393.6247/1
- 江口正. 1998. 「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』30: 325–344.
- 大島資生. 1996. 「補文構造にあらわれる「こと」と「の」について」『東京大学留学生センター紀要』6: 47–69.
- 大堀壽夫. 2017. 「認知言語学の課題——文化解釈の沃野——」西山佑司・杉岡洋子編『ことばの科学 東京言語研究所開設 50 周年記念セミナー』pp. 152–173. 開拓社.
- 加藤司. 2018. 「『パーソナリティ研究』の新たな挑戦—追試研究と事前登録研究の掲載について」『パーソナリティ研究』27(2): 1–16. doi: 10.2132/personality.27.2.26
- 金谷武洋. 2002/2013. 『日本語に主語はいらない 百年の誤謬を正す』[Kindle 版] 講談社.
- 金水敏. 1997. 「国文法」『岩波講座 言語の科学 5 文法』pp. 119–157. 岩波書店.
- 窪田悠介. 2019. 「理論的研究とは？」衣畑智秀編『基礎日本語学』pp. 260–282. ひつじ書房.
- 黒田成幸. 1998. 「主部内在関係節」平野日出征・中村捷編『言語の内在と外在』pp. 1–79. 東北大学文学部.
- 黒田成幸. 2005. 『日本語からみた生成文法』岩波書店.
- 酒井智宏. 2012. 『トートロジーの意味を構築する—「意味」のない日常言語の意味論』くろしお出版.
- 佐藤らな. 2019. 「X すぎる構文の考察—天使すぎるはなぜ言えるのか—」 *JCLA Conference Handbook 2019*, 107–110.

- ジャッケンドフ, レイ. 郡司隆男訳. 2002/2006. 『言語の基盤: 脳・意味・文法・進化』岩波書店.
- 田川拓海. 2007. 「『日本語に主語はいらない』に突っ込む: (6)理論がコロコロ変わり過ぎなんだよ!」(ブログ記事 <https://dlit.hatenadiary.com/entry/20070811/1186780228>)
- 田窪行則. 1998. 「文法(理論・現代)」『国語学』193: 31-38.
<http://db3.ninjal.ac.jp/SJL/getpdf.php?number=1930480560>
- チョムスキー, ノーム. 福井直樹・辻子美保子訳. 1957/2014. 『統辞構造論 付『言語理論の論理構造』序論』岩波書店.
- チョムスキー, ノーム. 福井直樹・辻子美保子訳. 1965/2017. 『統辞理論の諸相: 方法論序説』岩波書店.
- 西山佑司. 1996. 「「Aが増える」構文と変項名詞句」『言語文化研究所紀要』28: 49-85. 慶応義塾大学.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 西山佑司(編). 2013. 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房.
- 萩澤大輝. 2019. 「外心複合語の認知言語学的分析」*JCLA Conference Handbook 2019*, 111-114.
- 橋本修. 1990. 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163: 112(1)-101(12).
- 平岩加寿子. 2019. 「副詞の(間)主観性」*JCLA Conference Handbook 2019*, 115-117.
- 町田健. 2000. 『生成文法がわかる本』研究社出版.
- 三宅知宏. 2017. 「日本語学の課題: 「記述」と「理論」の壁を越えて」西山佑司・杉岡洋子編『ことばの科学 東京言語研究所開設50周年記念セミナー』pp. 74-96. 開拓社.
- 山泉実. 2008. 「間接疑問と潜伏疑問が共起する構文: その意味論・談話語用論・機能的統語論」森雄一他編『ことばのダイナミズム』pp. 223-239. くろしお出版.
- 山泉実. 2019a. 「極性疑問が潜伏している名詞」『日本言語学会第158回大会予稿集』, 302-308.
- 山泉実. 2019c. 「名詞句の“自由拡充”が抱える問題とその根源」日本科学哲学会第52回大会口頭発表.
- 山田祐樹. 2018. 「[こころの測り方] 自由を棄てて透明な心理学を掴む」『心理学ワールド』83: 34-35. 日本心理学会.
- 吉川正人・木本幸憲・岡本雅史・佐治伸郎. 2017. 「報告 第38回研究大会ワークショップ 理論研究再考—理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか?—」『社会言語科学』19(2): 87-92.
- レイコフ, ジョージ. 池上嘉彦他訳. 1987/1993. 『認知意味論: 言語から見た人間の心』紀伊國屋書店.